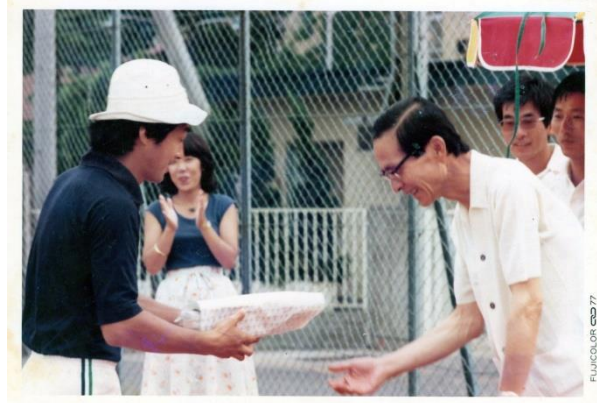


テニスと私

武田計測先端知財団
専務理事 大戸範雄

大船時代(1977～1980)

1977年の4月に入社した。博士課程修了後の入社だったので、もう29歳になっていた。配属先は、大船の中央研究所基礎研究部だった。45年前のことである。学生時代から遊びでテニスをしてきたが、大船では当時分析部門にいた大井敏民さんにみっちり鍛えてもらった。おかげで、入社早々の8月に開催された大船キャンパスのテニス大会Bクラスで準優勝し、中央研究所の大塚英二所長から賞品を頂くことができた。大塚さんもテニスが好きだったようだが、その当時は専ら見物に回られていた。翌1978年のテニス大会では野口宣靖さんを破っ



1977年夏大塚所長から賞品を頂く

てBクラスで優勝し、Aクラスに入れてもらった。それでやっと一人前のテニス選手として認められ、対外試合にも出られるようになった。一番印象に残っているのは、その年のオール三井テニス大会で、1955年の全米ダブルスを制した宮城淳選手の試合を見たことである。当時、オール三井大会はA、B、Cのクラスに分かれており、Aクラスには、関東選手権レベルの選手が沢山いた。宮城選手は、当時、40代後半だったと思われるが、非常にきれいなフォームでAクラスの若い選手を翻弄していた。三井グループには凄い人がいる、とつくづく感心した。

留学時代(1980～1982)



1981年Pryor教授(左端)とBaton Rougeのテニスコートにて

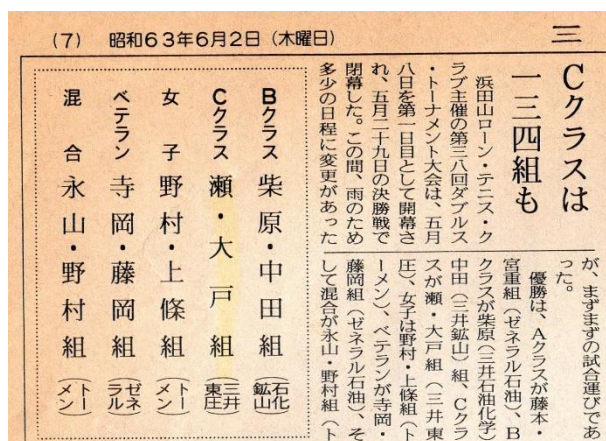
1980年から82年にかけて、生体内のラジカル反応を研究するためにアメリカのルイジアナ州立大学(LSU)にポストドク(客員研究員)として留学した。当然、LSUでも若い学生と一緒にテニスをした。そのおかげで、私のテニススタイルが変わった。学生時代からトップスピンのボールを打っていたが、それではハードコートで球足の速い学生のテニスについていけないのである。やむなく、打ち方をトップスピンからフラットに変えて、学

生のテニスに対抗できるようになった。研究室のW. A. Pryor教授もテニスが好きで、時々、お相手をした。「僕のバックハンドはステディだよ」と自慢してい

だが、50代前半であった Pryor 教授に負けることはなかった。

再び日本で(1982~2008)

日本に帰ってきてからは、留学時代の経験を生かして、千葉県茂原市の生物科学研究所で脳卒中急性期の治療薬探索研究を立ち上げた。茂原でも、もちろん、テニスをした。1988年には、若手の瀬智之君と組んでオール三井のCクラスダブルスの部に出場し、優勝することができた。5月8日から3週間にわたり、134組268人が戦った混戦を制することができ、私の生涯の金字塔になった。後になって気づいたことではあるが、右の三友新聞のスポーツ記事には、Bクラスでは柴原・中田組が東圧の淡輪・興津組を破って優勝したことが記載されている。勝たれた柴原さんと中田さんとは当時面識がなかったが、その後、三井化学と東洋エンジニアリングのテニスのOB会である「さんど会」で一緒にプレーするようになった。準優勝された淡輪さんは、後に三井化学の社長に就任された。



1988年6月2日 三友新聞

1997年に三井東圧と三井石油化学が合併した後、三井化学の医薬事業の命運をかけたいくつかの臨床試験(その中には私の脳卒中急性期治療薬も入っていた)が失敗に終わり、三井化学は医薬事業から撤退することになった。私は、医薬・バイオ事業室の医薬担当部長として三井製薬のシェーリング社への売却を担当し、その後、公益法人活動へ転じた。

1997年に三井東圧と三井石油化学が合併した後、三井化学の医薬事業の命運をかけたいくつかの臨床試験(その中には私の脳卒中急性期治療薬も入っていた)が失敗に終わり、三井化学は医薬事業から撤退することになった。私は、医薬・バイオ事業室の医薬担当部長として三井製薬のシェーリング社への売却を担当し、その後、公益法人活動へ転じた。

テニスのお陰で、得難い体験をしたことがある。2004年頃、私が勤めていた財団の専務理事だった松原謙一先生(元ヒトゲノム国際プロジェクト日本代表、2017年文化勲章受賞)にテニスに誘われた。場所は、多くの名選手が好試合を演じた田園テニスクラブ、お相手は、薬物代謝研究の泰斗、慶応大学医学部薬理学教室の加藤隆一先生だった。当時、松原先生も加藤先生もともに70歳台であったが、テニスはアグレッシブで、特に、松原先生はネットプレーがお上手であった。テニスの後、お二人と喫茶店に行って歓談したが、その時、加藤先生は、「僕は、退職したので週2、3回ここに来てテニスをしている。途中で昼食を摂って友人と歓談するので、一日いることになるね」と言っておられた。定年退職を考える時期になっていた私は、定年生活も悪くなさそうだと思いなおした。

テニスと私

武田計測先端知財団
専務理事 大戸範雄

さんど会(2008～2019)

再びさんど会でテニスをするようになったのは、2008年ころのことである。当時、浜田山のコートはなくなり、さんど会は、公営のコートを借りながらの運営であったが、幹事の實生さん、横田さん、豊田さんたちが頑張って、2010年ころから新小岩の私学事業団のテニスコートを定期的に変更できるようになった。さんど会には、オール三井のAクラスでプレーした松原章さん、Bクラスで優勝した柴原さんや中田さんがおられ、テニスのレベルは高かった。中心メンバーは、元三井化学副社長の岩井泰人さんと元常務の剣持武治さん、TECの元会長の園田保男さんであった。岩井さんと園田さんは東圧の同期、園田さんと剣持さんは北海道大学の先輩後輩という間柄もあり、さんど会の雰囲気は和気あいあいとしたものだった。テニスも楽しかったが、しかし、それ以上に中華料理屋でのアフターテニスが楽しく、月に一度新小岩に出かけるのが楽しみであった。

しかし、テニスクラブも人間と同じで歳をとる。メンバーが高齢化するのである。悲しいこともある。テニスが大好きだった溝江徹也さんは、病気でテニスができなくなった後も息子さんに連れられて、さんど会の会場にいらしたことがある。さんど会のプレーを見られ、息子さんと軽いボレーをした後、満足げに引き上げられた。溝江さんの訃報が伝わったのは、それから数か月してからであった。さんど会の中心人物の一人であった剣持さんは、今年の1月に他界された。剣持さんは東圧と石化が合併した当時、常務取締役として、海外部、ライセンス部、原料部、資材部などを管掌していた。合併したばかりで二社の部署が入り混



コロナ禍直前のさんど会 2019年12月21日

テニスと私

武田計測先端知財団
専務理事 大戸範雄

じった部門の経営は容易ではなかったが、温厚な人柄で乗り越えられた。さんど会では、老練なテニスを披露され、中々負けなかった。もう、お目にかかることができず、残念でならない。

コロナ禍の中で(2020～現在)

2020年にコロナのパンデミックが始まって在宅勤務となり、定年同様の暮らしをしている。新小岩のさんど会にも行けなくなった。そこで、茂原でやっているテニスの機会を2回増やして、週4回にした。実際は雨が降ったり、用事ができたりで、週3回という程度だろうか。加藤隆一先生のような優雅なテニス生活ではないが、少しでも上手になろうと心がけている。テニスの技術はどんどん変わっている。ボルグの時代はボールがバウンドして少し落ちてきたところをトップスピンで打つ打法が主流だったが、マッケンローが出てきてフラットに変わり、現在は、ボールをトップの位置でスピンをかけて打つ打法が主流である。ラケットの握りは極端に厚くなっている。バックハンドも、昔は片手打ちが主流だったのが、今は両手打ちのバックハンドになっている。両手打ちの方がダウンザラインに打った球がサイドにきれにくい。という訳で、私も、バックの両手打ちを試みているが、うまくいかない。しかし、人間一生勉強である。続けていれば、そのうちできるようになるだろう。

テニスの合間に東京農工大と日本工学アカデミーのバイオマスのプロジェクトのお手伝いをしている。つい先日は、三井化学のサーキュラーエコノミーの取り組みを取材させてもらった。三井化学も脱炭素社会に向け益々厳しくなるビジネス環境の中で頑張っている。

以上